



## “現場” は学びの宝庫

勉強方法は色々あるが実体験も大いに役立つ。例えば選挙の機会はいろいろなものが見える。

最近二つの選挙で選挙カーから応援してみた。1つは地方の7万人市の市議選。もう1つは東京郊外の20万市の市長選。いずれも友人への友情応援だが、人心などがよく見えるものだ。

前者の市議選は、三市町村合併後の初選挙。区域は大幅に広がったが、定数は増えない。そのため事実上現職（70人余）をリストラする選挙となった。定数30人に新人も含め32人が立候補。半数以上の現職はこの段階で消えた。その多くは人口の少ない小規模町村の出身議員。

選挙カーからみると、窓から手を振る人、仕事の手を休め握手にくるなど明確に態度を示す人もいるが、多くは投票態度を示さない人の山。演説を繰り返すうち、だんだん人影が票に見え

たり、演説が野山にむなしくこだまする無力感に襲われる。地方はマニフェスト選挙以前に、まだ地縁、血縁が強い。そこを見抜いて、くまなく地方回りをする小沢民主党の政治手法は未だ日本の風土にあった選挙戦術かもしれない。

後者の市長選は、多選批判を恐れての現職引退後の新人戦。大都市近郊とはいえ、田畑に新興住宅地が広がる地域。多くのサラリーマンは東京に通い、地元は寝に帰るベッドタウンだ。

4陣営を比べ選挙事務所の人の出入り、そこでの地元有力者の会話、各候補の街頭演説など皮膚感覚で色々な情報を掴む。応援演説を通じ有権者の手ごたえを感じていたが、所詮〇〇都民といわれる人達の集まり。地元への関心は低く悪天候もあり投票率は30数%。有効投票6万の中2万余で当選が決まった。支持は全有権者18万人のたった13%。これでも現行制度は氏を市長と認定するしかない。これで「代表」と言えるのか、制度自体に大いなる疑問を感じた。

広報委員 佐々木信夫（経済学部教授）

## 編集室

多摩丘陵に“城”を構える中央大学キャンパス。立地上、どうしても地域とのつながりが疎遠になるのは否めない。街に溶け込んでいた駿河台で大学ライフを過ごした身からすると、「街」を肌で感じられないのは、正直ちよつぷり寂しい。

だが、大学が地域（コミュニティ）と無縁であるはずがない。大学が保有する集約された知的資産と施設・設備は、地域にとつて大変魅力的に違いないからだ。

「多摩に中央大学ありき」との評価を高めるには、コミュニティと相互連携、相互理解を深めることが重要だろう。「大学街」の一角にあった駿河台

学生記者が取材・編集する大学広報誌

Hakumon

Chuo  
ちゅうおう

2008

夏季号

2008年(平成20年)7月1日発行 No.207

発行 中央大学広報委員会

〒192-0393

東京都八王子市東中野742-1

〈編集担当〉

『Hakumonちゅうおう』編集室

☎042-674-2146

印刷 泰成印刷株式会社

〒130-0026

東京都墨田区両国3-1-12

☎03-3631-8141

時代とは違って、独立したキャンパスの多摩では、やりようによってはむしろ大学は地域とつながりを持ち易い。そんな考えから、企画したのがシリーズ『大学と地域』。  
今回、「大学と地域」をつなぐ“足”である多摩都市モノレールをとり上げたのは、コミュニティにともに根をおろす中央大学とモノレールの関係を探るためだ。  
インタビュート、同時に中大生を対象に行ったモノレールに関するアンケート調査でわかったのは、大学とモノレールは切っても切れない関係になっているということ。当然といえば当然だが、両者の連携の必要性が双方から指摘されたのはひとつの収穫だと思う。  
今後にも生かされればと願う。  
(入学企画課 伊藤博)